

ベトナムの刷新は可能か	木村哲三郎	2
ビルマにおける民族主義と社会主義	根本敬	27
動きだしたカンボジア問題	大島寛	17
ラオスの悲劇と現状	竹原茂	44
クルドと湾岸の「戦後」	高橋和夫	64
南アフリカの実態	佐々木良昭	72
ミーチ・レイクとカナダ憲法	ノーマン・セクスミス	82
ある南方特別留学生の半生記	陶山宣明	96
中国共産党略史(二六)	土生良樹	117
チャートに見る世界経済の証券化する国際金融市場／長谷川聰哲	伊達宗義	61
ニュースレター／韓国		62
ニュースレター／アフガニスタン		63

KAIGAI JIJO

Journal of World Affairs

VOLUME 36
NUMBER 11
Nov. 1988

NEW ASPECTS IN INDOCHINA

Vietnamese Perestroika Possible ? / Tetuzaburō Kimura	2
Nationalism and Socialism in Burma / Kei Nemoto	27
A Thaw in Cambodia Issue / Hiroshi Ōshima	17
Laotian Tragedy and Current Situation / Shigeru Takehara	44
* * *	
Kurds and Post-war Politics over the Gulf / Kazuo Takahashi	64
Realism in South Africa / Yoshiaki Sasaki	72
Meech Lake: Canada's Constitutional Accord or Disaccord ? / Norman Sexsmith and Nobuaki Suyama	82
An Account of the Malaysian War-time Student to Japan / Yoshiki Habu	96
A Short History of the Chinese Communist Party (26) / Muneyoshi Date	117
* * *	
World Economic Outlook with Chart ⑦ Securitization in International Financial Market / Toshiaki Hasegawa	61
Newsletter / South Korea	62
Newsletter / Afghanistan	63

ある南方特別留學生の半生記

——ラジャー・ダト・ノンチック氏の回顧談

土生 良樹

はじめに

筆者は、一九八六年四月の金曜日、クワラルンプールの中央モスクで、ラジャー・ダト・ノンチック氏と出会った。イスラーム社会では、モスクで知り合った友は、神が紹介せる「親愛の友」と言われている。

今年のラマダン(断食月)開始の前夜、同氏邸で催されたクンドリー(祈祷夕食会)に出席した筆者に、同氏は「ハジ・ハブさん、JAGAM(マレーシア日本留學生協会)の組織活性化を手伝ってください」と語られた。これが発端となり、ASCOJA(アセアン日本留學生評議会)前会長、JAGAM会長である同氏とのインタビューを、四月十七日

から一ヵ月間のラマダン期間中におこなった。このとき、一九四一年から現在まで一戦中戦後四五年間の東南アジアの激動期に、マラヤ(マレーシア)の独立と国づくり、および近隣諸国友好に命を懸けた一人の男とその仲間たちの雄大なドキュメントを知ることができた。

ノンチック氏の名前には「ラジャー」の冠名がついている。セランゴール州サルタン家の一族である。一九二四年生まれの同氏は、現在六三歳である。同氏は一九四三年、日本軍政部から選抜されて日本へ留学した南方特別留學生第一期生である。独立後、連邦下院議員、同上院議員を歴任。政界引退後は日本との合弁企業十数社を創立して、マレーシアの経済発展に貢献した。

一九八四年四月二十九日、日本とマレーシア、さらに日本

とアセアンの友好促進の功績により、勲二等瑞宝章を受勲、マレーシア第一の親日家として著名な人物である。

また今日、アセアン結成(一九六七年八月)の生みの親は、インドネシアのマリク外相、マレーシアのシャフィー外相、タイのコーマン外相の三人であると言われているが、その陰にアセアン結成に尽力したのがラジャー・ノンチック、ヨガ・スガマ(インドネシア)ら、元南方特別留學生であった。

元日本留學生東京会議

一九八八年六月一日、午前一〇時。ホテル・ニューオータニの玄関前に掲げられたアセアン各国旗と日の丸の旗が新緑の薫りの微風に揺らぐなか、同ホテル楓の間では二年に一度の「JASCAA-ASCOJA会議」の東京会議が開催された。

この日JASCAA(財団法人・アジア留學生協力会)役員関係者に迎えられ、ASCOJA(アセアン元日本留學生評議会)の各国代表二十九名が、二年ぶりに一堂に会した。

この会議に出席した各国代表は以下の通りである。
インドネシア) PERSADA (Association of Indonesia Alumni from Japan インドネシア元日本留學生会)、

ヨガ・スガマ会長他七名。

マレーシア) JAGAM (Japan Graduates Association of Malaysia=マレーシア元日本留學生会)、ラジャー・ダト・ノンチック会長他一名。

フィリピン) PHILREJA (Philippines Federation of Japan Alumni=フィリピン元日本留學生会)、ホセ・S・ラウレル会長他九名。

シンガポール) JUGAS (Japan University Graduates of Singapore=シンガポール日本大学卒業生会)、ノマン・カイ・チャン会長他二名。

タイ) OJSA (Old Japan Students Association=元日本留學生会)、ピチュラ・プラナリス会長他四名。

一九七七年四月ASCOJA (ASEAN Council of Japan Alumni)とその傘下各国組織は、アセアンをサポートする目的で、ラジャー・ノンチック(マレーシア)、ヨガ・スガマ(インドネシア)、ベンジャミン・ラウレル(フィリピン)の三人が発起人となり、シンガポールとタイの同期生を加えて結成された。

同年八月、クワラルンプールで「第一回拡大アセアン首脳会議」が開催された。この会議には、日本、オーストラリア、ニュージーランドの三ヵ国首相が出席した。メインゲストは日本の福田首相であった。

当時の日本とアセアン各国との関係をふり返れば、三年前の一九七四年一月、田中首相がアセアン各国を歴訪の際、ジャカルタで学生の大デモに取りまかれ、さまざまな姿で宿舎のムルデカ宮殿を脱出する大醜態を演じ、衆人の失笑をかった。田中首相は、帰国後「外交姿勢を改めねば……」と、深刻な報告をしている。その後、一九七六年二月にバリ島で開催された「第一回アセアン首脳会議」へ三木首相が接触を試みたが、アセアン首脳は丁重に断わっている。

この時期、アセアン各国の元南方特別留学生は、それぞれの国の政・官・財・学・宗教各界で指導者長老の地位についていた。彼らの胸奥に去来したものは先の大戦以来、長年いだいてきた「日本こそアジアのリーダーである」という親日思考であった。

七七年の「第一回拡大アセアン首脳会議」に際し、ASCOJAと傘下各国組織は、それぞれの国で、各界の先頭に立って日本代表団を迎え盛大な歓迎会と各種の重要会議を開催、流暢な日本語で相互の意志疎通をはかることに貢献して日本とアセアン各国とのコーディネーターの役割を果たした。そして、このコーディネーターの役目は現在も継続している。

クワラルンプールでの会議終了後、アセアン各国とビル

含めたアセアン側の「アセアン民間企業開発計画」(PED計画)を採択した。

東京会議に出席した、ラジャー・ノンチック、ヨガ・スガマ、ベンジャミン・ラウレルらは、かつて一九四三年六月に南方特別留学生として東京へ派遣されて以来、戦後の激動の東南アジアで祖国の独立と建国を成し幾多の国家存亡の危機を乗り越え、東南アジアの平和共存と繁栄の祈りを込めた「アセアン結成」を成した固い絆で結ばれた同志である。

マラヤ小史

マラヤの歴史を遡ると、一〇世紀には、マラッカ海峡を内海にしてマラヤとスマトラの両地域に集合した各地のサルタンの連合国であるマラヤ王国が栄えていた。なかでもマラッカ王国は、中国とインド・アラビアとの貿易中継地として一大商業王国であった。

マラヤ植民地化の歴史は、一五一一年のポルトガルによるマラッカ占領から始まる。

ポルトガル軍の進攻に抵抗したマラッカ王アーマッド・シャーと王子マームッド・シャーが率いるマラヤ人は、約五年間にわたりポルトガル軍と戦うが、銃砲で武装したポ

マを歴訪した福田首相は、最終訪問国フィリッピンのマニラで、『心と心の触れ合い』を基本精神にした「マニラ声明」を発表した。このマニラ声明は、日本がその外交基調を戦後はじめて世界に向けて訴えたもので、アセアン各国は「マニラ声明」を「福田ドクトリン」と呼称して歓迎した。

「マニラ声明」を誘発したASCOJAに対応する日本側の組織、JASCAAが一九八一年二月に設立された。そして一九八三年秋、JASCAAはASCOJAの元南方特別留学生とその家族約二〇〇人を東京に招待し、南方特別留学生四〇周年記念大会を開催した。

このとき、大戦中に日本人と苦難を共にしたアセアン各国の元南方特別留学生が四〇年の歳月を経た現在も、日本に対する変わらない親愛の情を持ち続けていることをこの記念大会に出席した日本人は改めて知り、深い感銘を受けた。その後、JASCAAとASCOJAの両組織は、各国の意志疎通を一層促進すると共に、それぞれの国の政府と民間の協力を得て人材養成を中心にした各種開発へ積極的な協力活動を続けている。

今回の東京会議は、近年の円高によるアセアン日本留学生の経済的な困難を救済するために、日本側の「JASCAA奨学金計画」と、日本留学生の帰国後の就職安定をも

ルトガル軍に対して、刀と槍と弓だけのマレイ人は戦いに敗れ、マラッカ王国は滅びた。

一六四一年には、オランダがポルトガルを攻め敗りマラッカを占領する。マレイ人はオランダに抗して敗れ、多くの血を流している。一七八六年、イギリスがベナン島を占領した。一七九五年、イギリスがオランダに代わりマラッカを領有する。これは、当時イギリスが占領していたスマトラのベンングレインとオランダが占領していたマラヤのマラッカを交換したのである。さらに、一八一九年、イギリスがシンガポールを占領する。

マラヤ植民地史上最大の「反英闘争」「パーマンの叛乱」(一八九一年)をはじめ、イギリスのマラヤ全土の植民地化に反発して大小の叛乱が絶えることなく続発した。しかし武力の相違はいかんともしがたく、すべての叛乱が敗北で終わる。マラヤ歴史は血染めの反英闘争で彩られている。

二〇世紀に入って間もない一九〇五年の日露戦争での日本の勝利は、世界各地で植民地として隷属的な支配を強いられていた多数の被圧迫民族に大きな勇気を与えた。

イギリスの植民地支配に苦従していたマレイ人とて同じであった。

一九三八年、マレイ語新聞「ウルタ・マラヤ」の記者イブラヒム・ヤコブとインシャック・ハジ・モハammadの二人

が、クワラルンプールの、マレイ人民主義組織「マラヤ青年連盟」(KMM)を結成した。同じ頃、幻の書記長と言われる陳平と中国系住民により、マラヤ共産党(MCP)が創立された。マラヤ共産党は、マレイ人のマラヤ青年連盟による反英闘争とは別に、中国系住民の反英闘争の中核になった。

イギリスの植民地支配は、マラヤを三つに分割すること、巧妙な支配を完成していた。まずシンガポール、ペナン、マラッカは、イギリス直轄植民地で、シンガポールの総督府が直接統治した。一方、マラヤのサルタン領九カ国は、イギリス総督が直接統治せず、サルタンの統治する王国の形態のまま、イギリスの保護国になっていた。しかし、この九カ国は、二つに分割されていた。一つはペラ、セラングール、パハン、スンビラン四カ州の「マレイ連合州」(Federal Malay State)であり、各州にはイギリス高等弁務官(British High Commissioner)とイギリス駐在官(British Resident)の二つの事務所が設けられていた。もう一つはジョホール、トレンガヌー、ケダ、ケランタン、ペルリス五カ州の「マレイ非連合州」(Unfederal Malay State)で、各州にはイギリス高等弁務官兼イギリス顧問官(British Adviser)の二役職が派遣されていた。

このように、イギリスは植民地を支配し、植民地産業を開発

で見つめるマレイ人の中にラジャー・ノンチック(当時、一六歳)がいた。

ノンチックの目に、昨日までのマラヤの支配者であった英軍を敗走させる日本軍将兵の姿は、『ジョヨボの神話』であると思えた。『ジョヨボの神話』は、「東から来た黄色い軍神が率いる軍勢がマレイ人を苦しめる白い悪魔を打ち敗り、追いはらい、玉蜀黍の花が咲くまでの短い期間だけこの地にとどまり、やがて東へ引き揚げる。そのあとに平和なマレイ人の国が建設される」ことを人々に語り伝えてきた。この神話は、マレイ島嶼(マレイ・アチパラコマレーシア・インドネシア・フィリピン)のマレイ民族に伝承された有名な物語である。

日本軍が上陸した直後、英軍は「マラヤ青年連盟」のイブラヒム会長、イシャック書記長、カミールら幹部を逮捕、シンガポールのチャンギー監獄へ投獄した。英軍はイブラヒムら逮捕者を日本軍の進撃前にインドの刑務所へ移そうとしたが、日本軍の猛進撃で英軍が急速に崩壊したため逮捕者をインドへ移送できなかった。

一九四二年一月三日、ペラ州イポー市に設けられた藤原機関(Freedom, Friendship, Fujiwara)の「F」をとって「F機関」とも呼ばれる(ヘマラヤ青年連盟のオナム副会長が、二十数名のマレイ人青年を伴ってF機関長・藤原岩市

するために、インドとビルマでの統治で成功した分割統治の上に人種分業をマラヤに持ち込んだ。すなわち、イギリス植民地の香港から中国人を、インドからインド人を多数マラヤへ移入し、中国人を錫鉱床開発作業に、インド人をゴム農園の労働に使役した。現在、マレーシアの国家的苦悩である複合人種社会は、イギリス植民地政策に起因している。

植民地支配の崩壊

一九四一年二月八日、マレー半島のコタバル(マラヤ領)とシンゴラ(タイ領)に上陸した日本軍第二五軍(近衛、第五、第一八師団)は、マレー半島約一〇〇〇キロを縦断進撃して、翌年一月一日にクワラルンプールを、二月九日にジョホール・バルを占領した。そして、二月一日にイギリスのアジア植民地支配の牙城であったシンガポールを占領した。一五一年以来、ポルトガル、オランダ、イギリスによるマラヤ植民地支配は、わずか二ヵ月余の日本軍の進撃で崩壊した。

日本軍の猛進撃、なすところなく敗走する英軍、「イギリスのために戦えるか……」と戦いを放棄してつぎつぎに集団投降する多数のインド人将兵を、興奮と歓喜の眼差し

少佐を訪ね、KMM逮捕者の救出と日本軍への協力を協議した。

日本軍はベナン島を占領し、ベナン放送局からF機関によりマラヤ解放放送を電波にのせマラヤとスマトラへ放送した。特にケダ州サルタン王子トク・アブドル・ラーマン(独立後首相)の「マレイ人は日本軍に協力せよ」の放送は、多数のマレイ人の日本軍への協力を積極化させた。

藤原少佐はこの時期の状況を著書『F機関の秘密工作』に記している。

「……ラーマン氏は三二、三歳と思われる、気品と教養に富んだ偉軀堂々の洗練された紳士であった。ケンブリッジに学んだとのことであった。私はラーマン氏の厚意も断りがたく、別邸に一夜の宿を借りてアジアの将来、日本とマレイ民族の協力、マラヤにおけるマレイ人、インド人、中国人の親和問題等を心ゆくまで討議し共鳴し合った。そして、ラーマン氏自ら、ベナン放送を利用して、マラヤとスマトラの住民に、日本軍に対する協力を呼びかける私の申し出に心からの同意を得た……」

多数のマレイ人が村落を通過する日本軍将兵に珍しい南方の果物や椰子の実の水を提供し、軍事物資の運搬を手伝い、ジャンダル踏破通過の道案内を志願した。マレイ人の積極的な協力は、日本軍将兵にとって驚きであった。

ラジャー・ノンチックは、ベナン放送を聴き、日本軍の快進撃とマレイ人の日本軍協力を知り、興奮を抑えることができなかった。一六世紀（一五一一年）以来、ヨーロッパ勢力に支配された父祖の地マラヤの歴史と現状を黙視できない熱血が、若者の心をゆさぶり続けたのであった。

一九四二年から一九四五年までの三年八カ月の日本軍政期間は、マレーシア現代史の中で最も重要な時期の一つである。この時期は、マレーシアの教科書に『Tiga tahun Japan bulan』(三年八ヶ月)と題した大きな項目となっているほどである。マレーシアの著名な歴史学者ザイナル・アブディーン博士は、自著『Glimpse of Malaysia History』(マレーシア通史)で、「日本軍政は、東南アジアの中で最も政治的意識が遅れていたマレイ人にその意識の種子を播き、成長を促進させマラヤにおける民族主義の台頭と発展に大きな「触媒」の役割を果たした」と、日本軍政の効果について記している。

三年八ヶ月という極めて短期間の日本軍政期間であったが、日本軍はマラヤに大きな遺産を遺して去った。日本軍が遺した遺産の中で特記したいことは、将来のマラヤの指導者を養成する目的で、多数のマレイ人青年の教育訓練をおこなったことである。

イギリスは一九〇五年にペラ州クワラカンサルに、マラ

ヤ・カレッジ(英語教育の中高等学校)を設け、マレイ人青年の教育をおこない、さらに優秀な青年をケンブリッジなどへ留学させた。しかしこれはあくまでも、イギリス植民地政策遂行のためのマレイ人青年教育であった。ところが、日本軍政はマラヤのためのマレイ人青年教育をおこなった。同じマレイ人青年教育でも両者の目的には大きな違いがあった。

日本軍政部のマレイ人青年教育訓練は、第一に昭南(シンガポール)に開設された昭南興亜訓練所(一期生から三期生まで約二八〇名)と、後にマラッカに移転したマラヤ興亜訓練所(一期生から八期生まで約八〇〇名)がある。第二にこれらの青年の中から優秀な成績の青年を選抜して、より高度の教育を与えるために南方特別留學生(一期生八名、二期生六名)と徳川奨學生(五名)が日本へ派遣されている。第三にマラヤ義勇隊(各州に配置した合計約五〇〇〇名)とマラヤ義勇軍(約二〇〇〇名)を編成して厳しい訓練をおこなった。これら訓練所、留學生、軍事集団で養成されたマレイ人青年の総数は約八〇〇〇人である。

マラヤ青年の教育訓練

マラヤ軍政部の軍政部長・渡辺大佐は、将来のマラヤの

指導者養成のために有望な素質ある青年を選抜して特別な指導者養成機関で教育訓練することを計画した。第二五軍政監部は、渡辺大佐の構想を練り一九四二年五月一日に「南方建設の人材養成機関設置要領」を策定した。要領は訓練生マラヤのすべての民族から優秀な素質の人材を選抜し、彼らに精神と肉体に訓練を与え、しかも人種の壁を打破するために、寝食を共にした寮生活を基本とするとしていた。

渡辺軍政部長は、指導者養成機関のモデルとして、日本の吉田松陰が指導した「松下村塾」と中国の孫文が創設した「黄埔軍官学校」(校長・蔣介石、教務主任・周恩来が指導した陸軍士官学校)の二つを選び、それに近い教育機関の設置を強く主張した。

ラジャー・ノンチックは当時すでにF機関のメンバーとなつて活躍していた友人アブドラー・カミールから、昭南興亜訓練所の訓練生選抜が始まっていることを聞き、セラゴン州庁の軍政部へ担当官を訪ねて、昭南興亜訓練所への入所を熱望したが、訓練生規則の年齢資格に一年不足で受付けて貰えず応募を諦めた。しかし、同年六月、海軍がシンガポールに開設した海軍訓練所へ四〇名の訓練生の一人として、弟ラジャー・ナスロンや友人トング・アブドラーと共に入所した。ところがこの海軍訓練所は入所後一

カ月で、軍政管轄の変更のために閉鎖されたため、訓練生は解散帰郷を命じられた。

このときノンチックは、訓練所の教官に「私は、日本軍の訓練を受けた」と希望を強く訴えた。その教官は「ノンチック君、セラゴン州へ帰りなさい。そしてセラゴン州庁の軍政部へ君の希望を伝えなさい」と、親切にアドバイスを与えてくれた。セラゴン州クラン町へ帰郷したノンチックは、州庁の軍政部をたびたび訪ねて、担当官に希望を訴え続けた。ちなみに弟ナスロンは後年、日本軍により編成されたマラヤ義勇軍の将校になった。また友人トング・アブドラーは、南方特別留學生に選抜された。二人は、独立後、ともにマレーシア下院議員になっている。

一九四二年五月一日、マラヤ軍政部が「南方建設の人材養成機関設置要領」を策定したことはすでにふれた。シンガポールの占領が同年二月一五日である。マラヤ・シンガポールの占領地で残敵掃討作戦の戦火が続く時期、早くもマラヤの青年教育訓練所設置を決定し、同年五月一五日には昭南興亜訓練所を開設したのである。これは驚くべき迅速さである。

シンガポールの昭南興亜訓練所の開設と第一期生八四名の優秀な素質と教育訓練の実績が、その後の日本軍占領各

地での青年教育訓練機関を開設するモデルとなった。この訓練所は、翌年七月三十日に閉鎖されたが、この間、第一期生から第三期生まで約二八〇名が卒業した。

昭南興亜訓練所にかわり、シンガポール陥落一周年記念日の一九四三年二月一五日、マラヤのマラッカに「マラヤ興亜訓練所」が開設された。これは、日本敗戦まで継続され、第一期から第八期生まで約八〇〇名が卒業した。

昭南興亜訓練所の第一期生八四名は、マラヤとシンガポールから選抜された。すなわち、マレイ人(四八八名)、インド人(一九八名)、中国人(一五八名)、ユーラシヤ混血(二八名)である。マラヤ興亜訓練所の第一期生八五名は、全員マレイ人である。第二期生以後には、スマトラとボルネオのマレイ人青年も入所した。

昭南とマラヤの興亜訓練所の卒業生は約一〇〇〇名である。卒業生の大半は、後に日本軍により編成されたマラヤ義勇軍とマラヤ義勇隊の各級将校になった。興亜訓練所はマラヤ史上最初の士官学校になったといえることができる。ジャワを占領した第一六軍が、ジャカルタに開設した「タンゲラン幹部訓練所」(別名タンゲラン青年道場)がインドネシア史上最初の士官学校となったことから、両者は一対の存在として評価されている。

興亜訓練所卒業生の代表的な人物をあげておこう。

軍は、中国系住民に対する警戒心を強めていたのである。その点、中国系住民に比べて大多数のマレイ人は、積極的に日本軍に協力をした。

中国系を主にした反日ゲリラ組織で最大の組織は、マラヤ共産党が英軍コマンド部隊一三六部隊の援助を受けてジャングル内で結成した「マラヤ反日人民軍」(MPAJA)である。この反日人民軍(共産ゲリラ)は日本敗戦後、植民地の再建を図ってマラヤに復帰してきた英軍に対抗し、中国共産党の援助を受けて「マラヤ人民共和国」独立をスロガンに掲げたマラヤ共産党の武装ゲリラ部隊となり、マラヤ全土に勢力を拡大した。

一九四五年から一九五二年までの七年間、英軍はマラヤ共産ゲリラとの戦いにファイジー軍まで動員して戦闘を継続したが、勝てなかった。マラヤのジャングルで黽ごつこのエンドレス・ゲームとなり、共産ゲリラの掃討を不可能と判断したイギリスは、自ら播いた種のために、マラヤ植民地の再建を放棄した。

英軍が放棄した困窮の戦いを引継ぎ一九五〇年から一九五七年までの五年間で見事に共産ゲリラを鎮圧したのは、日本軍政下で教育訓練を受けたマレイ人青年である。彼らはこの戦いをマレイ人の国を建てるための「マラヤ独立戦争」として戦った事実を知り、筆者は民族主義の力強さを

〈昭南興亜訓練所〉

ラジャー・シャヘラン(二期、南方特別留學生、國璽長官)
サイド・マンソール(二期、南方特別留學生、留學中
熊本で病死)

ハシム・ナエマツト(一期、南方特別留學生、イミグラー
ション長官)

ハムダン・タヒール(二期、マレーシア科学大学総長)
アブドル・ラザク(三期、第二代首相)

〈マラヤ興亜訓練所〉

ガザリー・シャフイー(一期、情報相、内務相、外務相)
カディール・サムスディーン(三期、ペトロナス石油公
団総裁)

アブドラー・モハマッド・サレー(四期、内閣官房長官)

訓練生の選抜において、各州の担当官は、マレイ人青年を優先的に指名した。このために各期共にマレイ人青年が多数を占めた。

当初広く人材を集める予定だったがマレイ人を主にすることになった理由は、当時敗走した英軍がマラヤ共産党と提携して、中国系住民を主にした反日ゲリラ組織をマラヤ全土の日本軍占領地に残し去り、各地で反日ゲリラと日本軍との戦闘が継続していたことにあった。このため日本

感じることを禁じえなかった。

南方特別留學生

南方特別留學生制度は、南方軍総司令部が一九四三年一月一二日に決定した「南方圏教育に関する基本方針」によって実施された。目的は、将来の東南アジア各地の指導者として、より高度な教育を受けさせるために素質ある青年を選抜して、日本へ派遣した。日本政府では、大東亜省が担当官庁となり、その下部機関として国際学友会が世話を引き受けた。

留學生選抜の地域は、マラヤ(マレー半島)、シンガポール、スマトラ、ジャワ、セレベス(スラウエシ)、ボルネオ(サバ・サラワク・カリマンタン)、モルッカ諸島、ビルマ、フィリッピン、タイ、仏印(ベトナム・カンボジャ・ラオス)の東南アジア全域にわたっている。

一九四三年には第一期生、一九四四年には第二期生が派遣され、日本敗戦まで主に西日本各地の大学に在学した。

第一期生は、地域別に、第一組と第二組に分れて派遣された。第一組は、マラヤ(八名)、スマトラ(七名)、ジャワ(二三名)、ビルマ(一五名)の五三名が、一九四三年六月二十日にシンガポールから阿波丸で出発した。第二組は、

フィリップン(二七名)、セレベス・ボルネオ・モルッカ諸島(二〇名)の四七名が、一九四三年七月八日に、マニラから三池丸で出発した。さらに、タイ(一名)、仏印(一名)の二人が、別便で参加している。

マラヤ軍政部は、南方特別留學生候補生の選抜を管轄下のマラヤ、シンガポール、スマトラの各州庁へ命令した。州庁の指名により候補生として、マラヤ一ニカ州とシンガポールから二〇名、スマトラから二〇名、全員で四〇人の青年が選抜され、シンガポールのセラングン・ロードに開設された特別訓練所へ入所した。一ヵ月間の教育訓練と数回の各種選抜試験がおこなわれたのち、最終的には、マラヤ七名、シンガポール一名、スマトラ七名の一五名が、南方特別留學生に任命された。

一九四三年四月初旬、ラジャー・ノンチックは、セラングール州庁から「軍政部へ出頭せよ」と一枚の指示書を受け取った。彼の母は「お前が、あまりうるさく言うから、叱るための呼び出しだよ」と、たいへんな心配をした。ノンチック青年は「いや、この呼び出しは、いいことですよ。お母さん」と、母の心配顔へ優しく応えた。しかし、内心では「何事だろうか?」と、一抹の不安が消えなかった。へ何事であろうと、アッラーに誓って、私の行動は正

しい!」と、心の不安を打ち消し、軍政部へ出頭する日を得た。

四月一〇日、ノンチックは、クワラルンプールのセラングール州庁軍政部へ出頭した。州庁の担当官室前の廊下の長椅子に彼の一族であり親しい仲間であるトンク・ヤコブ(当時のセラングール州サルタンの弟)が、指令書が入った封筒を手にして不安顔で座わっていた。二人は予想もしなかった出会いにムスリムの挨拶を交わし、「お前もか!」と互いの顔を見合わせた。

呼ばれて担当官室へ入った。担当官・日本人将校の日焼けた顔が、ニコリ微笑むのを見て、へこれは、良いことだ」と直感した。担当官は笑顔が消し、厳しい顔つきで「トンク・ヤコブ君とラジャー・ノンチック君。君たちは、南方特別留學生の候補生に指名された。来る五月一日に昭南特別訓練所へ入所のこと……」との命令であった。ノンチックは、嬉しさと跳び上がった喜びたい気持ちを懸命に抑えた。

一九四三年五月一日、ノンチックは、シンガポールのセラングン・ロードに開設された特別訓練所へ四〇名の候補生の一人として入所した。

同期生の中には前年、ノンチックが羨望の眼で見つめた昭南興亜訓練所の卒業生ラジャー・シャヘラン(ベラ州)、

ハシム・ナエマツト(マラッカ州)、サイド・マンソール(ベナン州)、さらに海軍訓練所で一緒であったトンク・アブドラー(スミラン州)など学友や友人たちがおり、予想もしなかった再会に驚き喜んだ。

候補生には、特別訓練所の緑色の星の帽章がついたカーキ色の軍帽、軍服(半袖シャツと半ズボン)、軍靴、さらに下着まで支給された。全員の軍服シャツの胸には、教官と候補生が互いに名前を早く覚えるように、カタカナで書いた名札が縫いつけてあった。各自の私物は、コーラン一冊、辞書一冊、タオルとサロン一枚、これ以外はすべて訓練所に保管された。

まず候補生は身体検査で体重、身長、胸囲が測定され、次に全員が頭髪を丸刈りにされた。これが最初のカルチャー・ショックの体験であった。

訓練所の日課は、午前六時(現在時間五時)の起床から午後九時の消灯まで、一日のスケジュールがビッシリと組まれている。

第一日目から厳しい規則と激しい訓練。精神力重視の気風が育成された。候補生は、朝から晩まで「精神」を呼吸した。教官が繰返し言い続けたことは「もし、キサマが精神を持っていないなら、キサマは人間である。精神のないヤツは、虫ケラ同然である」と、いうことばであった。訓練

の厳しさは、昭南興亜訓練所を首席で卒業した頑張り屋のシャヘランですら、時には溜息をつくほどの猛訓練であった。ノンチックは、一年余り待ちに待って、やっと掴んだ機会である。彼の若い健康な体力と固い決意に支えられた気が、厳しい訓練に耐え、数回の選抜テストをクリアした。

訓練所内では、いかなる人種階級の差別もなく、候補生は、みな平等であった。二日しかなかった訓練所の休日、候補生は昭南神社に参拝し、ブキテマ高地頂上の忠魂碑を訪れ、さらに英軍司令官バーシバル中将が日本軍司令官山下中将に降伏したフォード自動車工場跡を見学した。候補生が隊列を組んで堂々と歩く。シンガポールの街のあちこちで数ヵ月前までマラヤ植民地を支配していた英濠軍将兵が捕虜となり、それまではマレイ人がやっていた卑しい作業に従事、道を歩く人からタバコを恵み与えられて喜んでいる姿を各所で目にした。その光景は、アジアの新時代の夜明けを迎え、新時代のマラヤの指導者たらんとする強い自覚を青年たちに与えた。

特別訓練所での忘れえない記憶は、日本の試胆会を応用した選抜テストであった。訓練所の前には、セラングン・ロードをはさんでシンガポール最大の墓地があった。訓練

所に入所して五日目の深夜、けたたましく響くラッパの音で非常召集がかかり、合宿寮のスピーカーから「全員軍装して校庭に集合せよ！」との命令が伝達された。昼間の猛訓練に疲れて熟睡していた候補生は、真つ暗闇の中で跳び起き、大慌てで服装と装備を身に着けた。間違つて隣の者のシャツを掴んだり、靴を探したりして校庭に整列した。

何が始まるのか、誰も解らない。教官の指示は「一人づつ前の墓地へ行け！」と順番を指名された。墓地にはさまざまな仕掛けが準備され、採点の教官が適所に隠れていた。幽霊の扮装や虎のぬいぐるみを被った教官が墓地の各所にひそみ、通過する候補生を襲い、青竹の鞭で叩き伏せた。ぶざまな醜態を示せば減点された。暗闇の中で光る虎の瞳と吼える音響効果には、腰を抜かすほどの驚きをあらわす候補生もいた。ちなみに、マラヤ・スマトラのマレイ人にとつてジャングルの虎はこの世で最大の恐怖の的であった。ノンチックは機敏な体質と覚悟を極めた根性で、定められたコースを進み、襲いかかる教官の攻撃から巧みに逃れ一人の幽霊の扮装を破り裂いて全コースを通過した。

翌日の講評発表の際、訓練所長・山崎大尉から「ラジャー・ノンチック。キサマは勇氣と胆力は十分であるが、いささか血氣の勇が過ぎる。今後自戒せよ！」と、四〇名中ただ一人、所長から名差して指摘された。

学校、広島で原爆死

興亜の雄途

一九四三年六月二〇日、午後三時。

南方特別留学生五三名の若き獅子たちを乗せた日本郵船の客船・阿波丸（一万二四九トン）は、港湾警備隊と軍政役員に見送られて、ジュロン埠頭を離れた。阿波丸の甲板に立つラジャー・ノンチックは、離れゆくシンガポールの緑の丘へ決意の眼差しを向けていた。

シンガポールを出港後、米軍潜水艦の攻撃を警戒してジグザグ・コースの航海を続けた。船内では、教官により日本語の授業が継続された。途中、台湾の高雄港に寄港して一泊した。しかし留学生の下船は許されず、船中で日本語の授業が続けられた。

六月二五日、夕刻。

阿波丸はシンガポールを出て五日目、九州の門司港に入港した。関門海峡に船が入ってからは、全員が甲板に立ち、肌心地よい涼風の中で初夏の夕陽を受ける両岸の新緑と家並みの黒い屋根瓦をあきずに日没まで眺めた。ラジャー・ノンチックは、「日本へきた」との実感を抱き、決意を一層固くして日本の潮風を何度となくすい込んだ。

六月一五日、候補生四〇名からマラヤ・シンガポール八名とスマトラ七名の一五名が選抜された。一五名は、マラヤ軍政監部で南方特別留学生に任命された。主だった顔ぶれをあげておこう。

ラジャー・シャヘラン（二二歳、ペラ州、昭南興亜訓練所一期、宮崎高等農林学校、福岡高等学校、京都大学、独立後王宮国軍長官、健在）

サイド・マンソール（二二歳、ベナン州、昭南興亜訓練所一期、熊本医大、熊本で病死）

ハシム・ナエマツト（二〇歳、マラッカ州、昭南興亜訓練所一期、横浜警察学校、独立後イミグレーション長官、健在）

ボスタム・クルシ（二〇歳、シンガポール、福岡高等学校、独立後イミグレーション長官、近年病没）

ニック・ユスフ（一八歳、ケラントアン州、広島高等師範学校、広島で原爆死）

ラジャー・ノンチック（一七歳、セラゴン州、海軍訓練所、宮崎高等農林学校、陸軍士官学校、福岡高等学校、東京大学、独立後下院議員、上院議員、健在）

トック・アブドラー（一七歳、スピラン州、海軍訓練所、宮崎高等農林学校、陸軍士官学校、福岡高等学校、京都大学、独立後下院議員、健在）

サイド・オマール（一七歳、ジョホール州、広島高等師範学校、独立後下院議員、健在）

年長者シャヘランの発議で日没の甲板にマラヤ、スマトラ、ジャワからの三七人のイスラーム教徒の留學生が整列し、夕陽が沈む西の方向「キブラ」（メッカの方向）へ向かい夕刻の礼拝と航海の無事を感謝してアッラーへの礼拝を捧げ、合わせて今後の平安と神のご加護を祈った。

留學生は、翌日上陸することになり、船内にもう一泊した。その晩の夕食には、船長の厚意で、赤飯と尾頭つき鯛の焼き魚が食卓に並べられた。翌二六日は、朝から検疫と入国手続きがおこなわれ、昼前に門司埠頭への上陸が許可された。

埠頭には、大東亜省、国際学友会、軍関係者、福岡県と門司市の代表者や婦人団体、学生代表、新聞記者、カメラマンなど多数の人が南方特別留學生を出迎えた。埠頭広場での歓迎式を終えて、バスで宿舍の丸山荘へ案内された。この宿舍は、純日本式の大きな旅館である。留學生は、ふすま、障子、畳の部屋など、すべてが珍しく、ゆかたに着替え座敷に正座して日本茶を飲む友の姿を互いにからかつて、どの部屋も賑やかであった。

この夜が日本での第一夜であった。初めて日本の風呂に入った時の驚きは、たいへんなショックであった。年長者で、グループのリーダーを自他共に認めていたラジャー・シャヘランが「みんな丸裸になって一緒に風呂へ入るな

ど、とてもできない」と、憮然として座敷に座ったままだ。ラジャー・ノンチックは、「シャヘランさん、水牛の群れに入れば鳴き、山羊の群れに入れば騒ぐと諺言に言うでしょう。われわれは日本にきたのだから、今日からは日本の習慣に合わせて日本人と同じ生活をせねばなりません」とさとした。ノンチックは、日本の諺言「郷に入っては郷に従え」と同じ、マラヤの諺言でシャヘランを説いたのである。

しかしそのラジャー・ノンチックにしたところで、驚きをかかせなかった。「あの晩の日本の風呂に入る時の驚きは、四五年を経た現在でも鮮明な記憶です。生涯忘れることのできない日本での最初のカルチャー・ショックでした。私たちは、人の前で丸裸になることはありません。しかもマレーシアでは、日本のような熱い湯に入る習慣がありません。みんなで丸裸になった恥ずかしさと、湯船の湯が熱いので、驚きと困惑で大騒ぎの風呂でした」と回想してくれました。

風呂から部屋へ帰ると、すでに部屋には布団が敷かれていた。季節が初夏であったから、二枚の敷き布団と一枚の夏用掛け布団が並べてあった。誰もどのようにして寝るのか解らない。ノンチックが、掛け布団の上に寝転がったら、シャヘランも、アブドラーも、同じように真似て寝転

がった。教官が、各部屋を見回り、掛け布団をかむって寝るように注意してくれた。

翌朝六月二十七日。留学生第一組は、門司から関門海峡を連絡船で渡り、下関へ向かった。関門海峡の海底トンネル鉄道は、留学生たちの関心の的であったが、なぜか連絡船で渡った。下関からは、特別列車の一等車で東京へ向けて出発した。車窓から眺める山陽線沿線の瀬戸内海の初夏の風景の美しさは、留学生たちの目をとらえてはなさなかった。耕して頂上まで至ると聞いた瀬戸の島々の段々畑を眺め、日本人の勤勉さを改めて知った。黄色い絨毯を敷いたような菜の花の風景には、車内のあちこちで感嘆の声が高きなど、徳山、広島、岡山、姫路、神戸、大阪、京都と特別訓練所の歴史と地理の学科で学んだ地名の駅を通過するたびに、全員の会話がはずんだ。マレー半島のコタバルからシンガポールまでの約一〇〇〇キロを進撃した第二五軍の主力であった第五師団は、広島の師団であったから、マラヤの留学生は第五師団の将兵から彼らの故郷広島の話を知り、目を輝かせて沿線の風景を眺めた。

翌二八日午前九時。南方特別留学生第一組五三名を乗せた特別列車は、東京駅に到着した。東京駅では、陸軍省、大東亜省、国際学友会の代表たち、その他、報道関係者、南方特別留学生に好

意と関心を寄せる多数の歓迎陣が出迎え、関係官庁の代表者が出席して東京駅のステーション・ホテルで歓迎式がおこなわれた。式典終了後、留学生は東京駅から宮城広場まで隊列を組んで行進し、二重橋前に整列して宮城を奉拝した。ノンチックは、東京へ無事到着した感謝をこめて最敬礼を捧げた。彼はその朝、車窓から眺望した富士山の雄大美とこの時眼前にした宮城の荘厳美から、日本民族と日本文化の源泉を知った思いがした。

留学生たちの活気ある行動は、彼らを出迎えた人たちに好感を与えた。国際学友会の金沢謹は、著書『想い出すことなど』に「彼らが訓練所で身につけた軍隊調の洗練されたスマートな態度や規律に賞賛の言葉をかけずにはいられなかった」と記している。

ラジャー・ノンチックの回想では、「東京駅の大食堂で、東条首相の歓迎演説を聞きました。われわれはまだ日本語の勉強が十分でなかったので、演説の内容はよくわかりませんでした。ただ『大東亜共栄圏』『アジアの植民地の解放』という言葉は解りました」とある。しかし演説は大東亜省の東光武三文化課長が代読したのであった。

南方特別留学生第一組五三名は六月二八日に到着し、第二組四九名は七月一九日に到着した。

七月二一日、南方特別留学生は大東亜省と陸軍省を表敬

訪問した。大東亜省では青木一夫大臣が、留学生を迎えて歓迎に辞を述べた。陸軍省では、富永恭次次官が東条英機大臣(首相)に代わり留学生を大臣室に迎え、歓迎の辞を述べた後、東条首相からの贈物である万年筆を一人ひとりに手渡した。この万年筆には、英語で「Pen is better than sword」(文は武より強し)と彫り込んであった。

翌年、ラジャー・ノンチックは陸軍省の命令で宮崎高等農林学校から陸軍士官学校へ転校させられるが、マラヤ独立と新国家の国つくりのために軍人でなく政治家への道を学ばんと希望し、陸軍士官学校から福岡高等学校へ、さらに東京大学へ進学することになった。当時、泣く子と陸軍には勝てないと言われた陸軍省を相手に、自らの意志を押し通す、命懸けの転校交渉をやったラジャー・ノンチックの「マラヤ独立」に懸けた決意の固さがうかがえる。

戦時下の東京で

南方特別留学生第一期生は、出身地別に分れて各留学生寮へ入寮した。

マラヤ、スマトラ、フィリッピンの一部(国際学友会・本郷寮・目黒区碑文谷)

ジャワ(南洋協会・第一寮・目黒区下目黒)

ノイリッピン(フィリッピン協会・学生寮:東大久保)

セレベス、ボルネオ、モルッカ諸島(新興亜会・大東亜寮

…豊島区高田)

ビルマ(ビルマ協会・孔雀寮:神田)

その他(国際学友会・目黒男子寮:目黒区上目黒)

(国際学友会・大久保寮:新宿区柏木)

ラジャー・ノンチックは、「われわれは、マラヤ、スマトラ、フィリッピンの学生と一緒に本郷寮に入寮し住みました。私が日本敗戦後、インドネシア独立戦争のスマトラの戦闘に参加したのは、あの本郷寮の同期生であったスマトラの七名が、独立軍の指揮官になっていたからです。さらにフィリッピンの同期生とは、現在も仲良く交際をしています」という。アセアンのヒナ型がこの寮生活にあったといえよう。

国際学友会は上目黒のアメリカン・スクールを接收し、ここに国際学友会日本語学校を開設した。第一期生は、翌年三月までこの学校に在学した。

この学校は東横線中目黒駅の近くにであった。マラヤの八名が住んだ本郷寮は、同じ東横線の学芸大学駅に近かった。東横線の代官山駅をいつの頃からか「ダイコン山」と呼ぶようになった。それは日本語学校で「女性の太い脚のことを大根足という」と聞き、それ以後、代官山駅をダイ

コン山と呼ぶようになり、留学生仲間へたちまち伝播した。

国際学友会の専務理事に、ビルマ戦線の第五師団長から竹内中将が赴任してきた。竹内中将は体軀堂々たる將軍であったが、留学生を敵しく優しくわが子のように指導し、多くの留学生から「校長先生」と尊称された。

留学生には、日本政府から一ヵ月一〇〇円の奨学金が支給された。この中から、寮費、洗濯代、衣料代、書籍代などを支払い、残金約二〇円が小使銭であった。

ノンチック、シャヘラン、アブドラーの三人はいつも一緒に行動し、寮でも学校でも「マラヤの三人組」と呼ばれていた。ラジャー・ノンチックは、激しい気性の若者であった。ラジャー・シャヘランは、大きな理想を胸に秘めた青年であった。トンク・アブドラーは、熟慮決断の正義感あふれた青年であった。日本語学校の放課後は、三人で渋谷や新宿へ出かけた。渋谷の道玄坂の商店街や新宿の伊勢丹デパートの散策は、知識吸収欲が旺盛な留学生たちに人氣の場所であった。

当時の日本の生活は、すでに完全な配給制度の時代であった。留学生が直面した深刻な問題の一つは、食べ物についてであった。日本の料理に不慣れでかつ香辛料の違いもあったが、主食の米の不足は南方の食糧豊富な社会で育

った留学生たちに、生まれて初めての空腹感を体験させた。その後、南方特別留学生には、政村から米の特別配給が考慮された。

金沢謹の著書『想い出すことなど』によると、「……食糧に対する留学生の不満が出始めた。……一人一日二合三勺の米の配給では到底足りようがないことは最初から予想されていた。これらの学生諸君は上流家庭に育ったものが多かった。……特にフィリッピン一般学生の場合はこの傾向が著しく、食糧に対する不満も切実のものがあつた。……熱心に都庁を訪れ……漸くのことに一人一日一合の特別配を受けることが出来た。……油や肉を手に入れる工夫をしなければならぬ。芝浦にある屠殺場に出掛け、臓物を買い出す。……これとても陳情もし御礼もしての上のこと……野菜の買出しなど時には遠く群馬県や神奈川県などに泊りがけで足を延ばし……自転車にリヤカーを付けて行く。帰る途中何回か交番で訊問を受けたそうだがその都度、南方特別留学生の重要性を強調して、警官に見逃して貰うのだが……」とある。受入側の日本自身、相当に氣をつかったことがうかがえる。

このことは留学生にも理解されていた。ラジャー・ノンチックの回想は当時を、「あの当時の東京は、敗戦前後に比べればまだまだよかったですネ。しかし食糧はじめ、すべ

ての物が配給制度になっていましたが、まだ食べ物がありませんでした。留学生も寮では日本人と同じ食生活でした。井一杯だけのご飯、みそ汁と野菜、そしてときどきは魚が出ました。馬の肉や鯨の肉の料理、さらには蛙の料理も出ました。蛙の料理は初めの頃、誰も解らないで食べました。パンは無かったですネ。しかしよく探せば広い東京のどこかの店でパンを売っていましたが、長い列に並んで待たねばならないので、われわれには買えませんでした。トコロテンは、まだたくさん売ってました。ある時、寮で配給されて大切に保管されていた砂糖を、トコロテンに振りかけて食べたらいよいよ良かったが、後で寮監の先生からひどく叱られました。先生たちが、留学生の食糧をたいへんな苦勞で集めておられることと、政府から米の特配を出して貰っていることを知り、本郷寮では『食事の不平を言うな!』と全員で戒め合いました。私たちは、あの時の先生たちのご苦勞に対して今でも深く感謝をしております。

大戦下の異国での空腹な留学生生活であったが、彼らは若く健康な身体と使命感が旺盛した精神に支えられて、毎日充実した東京の生活であった。

国際学友会は、八月の夏休みを利用して日本語学校の移動教室を実施した。留学生はこの移動教室により、食糧不足と暑気の東京から避れ、高原涼気の浅間山麓と長野県各

地を旅行し十分の英気を養った。本郷寮生は、長野県下のリンゴ園でミヤゲに貰った重いリンゴ箱を各自が担ぎ、全員が元気に帰寮した。その頃、本郷寮の近くの工場に長野県からきた若い女性ばかりの勤勞奉仕隊が働いていた。寮生は、若い女性が機械油に汚れ汗を流して働いている姿を見て、「労働の尊厳」を改めて認識した。彼女たちの故郷長野県のリンゴをプレゼントしたことが機縁となり、日本の若い女性グループと初めての交際が始まった。寮生たちの中には、日本語学校からの帰りにわざわざ奉仕隊が働く工場の方へ回り道して、彼女らと作業終了後のデートの約束を交わす勇者がいた。しかし本郷寮の寮規則は、午後七時以後の外出が禁止されていた。ラジャー・ノンチックの部屋は二階であった。彼の部屋には、空襲や地震災害の脱出用ロープが窓際に備えられていた。本郷寮の勇者たちは、順番を決めて、毎日のように、ノンチックの部屋から脱出用ロープを使って外出し、デートに出かけていた。

若い女性たちとの交際は、彼らの日本語能力を急速に上達させ、日本語学校の教師から「本郷寮の寮生は、最近の上達がたいへんによろしい」と褒められた。勇者たちは、冷や汗を流した。

国際学友会は、留学生の日本語学習と並行して、各地の学校、訓練所、工場などの見学研修を実施した。

医中將・田中一三博士の和洋折衷の立派な邸宅があった。ラジャー・ノンチックたちは、いつの頃からか金曜日のモスク礼拝後には田中邸へ立ち寄ることが習慣になっていた。田中博士は、軍医中將の軍服が似合う風格と高い教養のある紳士であった。

ノンチックたちは、博士を導師として敬慕した。博士の豊かな人間性と巧みな英会話を交えた薫陶を受け、マラヤ独立へ向けて開眼を得て大きな成長を遂げた。博士は、世界の歴史、東洋哲学、アジアの現状、さらに独立を志向する青年の心構えについてたびたび訓話を与えた。ノンチックたちが、大きな感銘を受けた話は、中国の辛亥革命を成功させ、清朝を倒して中華民国を建国した孫文と同志・鄭士良、山田良政、汪精衛（兆銘）らの中国革命と、インド独立運動の副將チャンドラ・ボースの反英闘争の苦難の物語であった。

田中博士は、「かつての孫文の同志・陳天華が言うている『……孫文は革命の英雄にあらずして、失敗の英雄である』と。諸君がマラヤ独立に命を懸ける決意は立派であるが、孫文の故事でも明らかのように、独立も革命も強力な軍隊と豊富な資金を持った国家政府を相手に戦い勝ち、奪い獲るものである。孫文の故事を諸君に話したのは、諸君が独立を戦い奪るためには『連戦連敗してなお不屈』の精

学校——陸軍幼年学校、陸軍戸山学校、陸軍士官学校、美術学校（現・芸術大学）、東京高等商船学校（現・商船大学）、霞ヶ浦海軍航空学校、横須賀海軍砲術学校、茨城県内原満蒙開拓幹部訓練所など。
工場——日本鋼管、森永食品、三菱重工業、石川島造船所、立川飛行機製作所など。

その他——美術館、大正天皇陵、国技館の大相撲、歌舞伎座、東劇の音楽と踊り、三越劇場の映画などである。歌舞伎座と東劇は、彼らが観劇したのが最後の公演となり、その後、戦時態勢のために閉館となった。

留学生は、日本語学校を修了した後、国際学友会により食糧事情と温暖な気候を勘案されて、西日本の上級学校の入学試験を受けて分散進学することになる。ラジャー・ノンチックやヨガ・スガマたちは、宮崎高等農林学校（現・宮崎大学）へ入学するが、その後、陸軍省からの指示で神奈川県座間の陸軍士官学校へ転校させられる。国際学友会の研修で陸軍士官学校を見学したが、翌年、自らは陸軍士官学校へ転校させられることは知らないで見学したということなる。

マラヤ、スマトラ、ジャワのムスリム留学生は、毎週金曜日のイスラーム合同礼拝日には、代々木上原の東京モスクでの礼拝に参加した。当時、東京モスクの近くに陸軍軍神、すなわち『初一念』の心を培い堅持することが大切である。それは極めて困難なことであるが、今ここで、諸君が、その覚悟を新たにすることを望みます」と語ってくれたという。

この田中博士の薫陶を受け、ラジャー・ノンチック、ヨガ・スガマたちマラヤ・インドネシアの若き獅子たちは民族自決、祖国独立の決意と前途の困難への覚悟を改めて胆に刻み込んだ。食糧難の東京で毎日の空腹感にさいなまれているノンチックたちは、田中夫人と息女・恒子さんが、心を込めて料理してくれる代用食品のご馳走に舌づつみをうつつ毎週であった。可憐な女学生の恒子さんは、田中邸に出入りする留学生全員の大切なアイドルであった。

日本留学時代の思い出は、苦しいものから甘いものまで尽きることはないほどに多い。それらはノンチック氏らの脳裏に強烈に焼きついているのである。

おわりに

筆者は一九六九年から一九六八年までの一七年間、東マレーシア・サバ州に在り、州政府に協力して、奥地僻地の村落でイスラーム青少年の指導を担当した。その間、カミディーン氏（元・サバ州建設大臣）とユスフ氏（元・ブルネイ

首相)の二人と親交を得た。二人は元南方特別留学生(第二期生)で、南方特別留学生について断片的に話を聴くことがあった。

さらに筆者は一九八四年、二万四千余人のマレーシア巡礼団に加わりメッカ大巡礼を修礼した。このときもマレイ人長老巡礼者で、興亜訓練所出身者五人から回顧談を聴くことがあった。

マレーシア第一の親参家ラジャー・ダト・ノンチック元上院議員の名を聴いて久しい。同氏とは、冒頭で述べたようにモスクの礼拝で隣り合わせに座り、祝福の挨拶を交わしたのが機縁になり、以後、親交を得ることになった。奇遇にも同氏は、筆者がサバ州に在任の頃、イスラームの師父として薰陶を受けた故ティティンガン元上院議員と同志的友人であった。

同氏へのインタビューは、戦中戦後をつらぬく四五五年間の日本と東南アジアの激動期の現代秘史の取材になった。ここに紹介したのはその一部で、ノンチック氏の立志篇部分である。いずれ全体像にせまってみたいと考えている。

(はらよしき・海外事情研究所在外研究員)

●参考文献

Tarlebak, Abdullah Hussain, Kuala Lumpur, Pustaka Antara, 1965.

Glimpses of Malaysia History, Dr. Zainal Abidin bin Abdul, Kuala Lumpur, Dewan Bahasa dan Pustaka, 1970.
Sejarah Malaysia, Darjah Enam, Kuala Lumpur, Dewan Bahasa dan Pustaka Kementerian Pelajaran Malaysia, 1985.
Tiga Tahun Lapan Bulan, Saleh bin Daud, Kuala Lumpur, Dewan Bahasa dan Pustaka, 1986.
Raja Keluang, Kumpulan Cerita Rakyat, Malaysia Kuala Lumpur, Dewan Bahasa dan Pustaka, Kementerian Pelajaran Malaysia, 1985.

Di Bawah Bendera Malaysia, Arman bin Sanj, Petaling Jaya, Penerbit Pajar Bakti, 1987.

Sejarah, Zainal Abidin Kasim, Kuala Lumpur, Times Books International, 1988.

「機関の秘密工作」藤原岩市著、番町書房、一九七二年。

「想い出すことなど」金沢隆著、国際学友会、一九七三年。

「露帝、東方より来たる」田中正明著、自由国民社、一九七九年。

「東南アジアの解放と日本の遺産」ジョイス・C・レンブラ著、秀英書房、一九八一年。

「興亜訓練所と南方特別留学生」明石聡彦著、一九八一年。

「南方特別留学生トウキョウ日記」レオカティオ・テアシス著、秀英書房、一九八二年。

「ASEAN」小木曾功著、教育社、一九八二年。

「南海のあけぼの」総山孝雄著、叢文社、一九八三年。